

# SORA

web magazine 2013.feb. vol.08

美しい海と自然に魅せられた高砂淳二が捉えた「モルディブ」。  
何度訪れても「南国」を感じられる魔法の国です。

Photo & Text : Junji Takasago

MAP  
CLICK!

# .....モルディブ..... Maldives

tsumi-shima tsumishima.com  
ダイバーの夢をつみあげていく島



(株)ワールドツアープランナーズ  
www.wtp.co.jp

© 2012  
World Tour Planners Co.,Ltd.  
All Rights Reserved.





驚き

Surprise

.....モルディブ.....  
Maldives

ここは「南の島」そのものが存在する

初めてモルディブに行ったのは、1985年のこと。入国審査を済ませ、空港の横にある、オンボロのドーニ（モルディブの舟）が何艘か停泊している港に荷物を持って移動した。港であるにもかかわらず、水が完全に透き通っていて、色の着いた魚たちが当たり前のように泳ぎ回っていた。そんな光景を見たのは初めてで、僕は心底驚いてしまった。このとき僕はモルディブに完全に魅了されてしまった。

リゾートに着くと、それまで頭の中に描いていた“南の島”が、そこにそのままあった。

すぐに一周歩けてしまうような小さな島。島を縁取る真っ白いビーチ。ヤシの木がビヨヨンと斜めになって海の上に張り出し、コテージの前にそのヤシの木の葉っぱが、パラパラと心地よく垂れ下がっている…。そして、その先には明るく透明な海が静かに広がっていた!!!

東北の港町で生まれ育った僕には、海辺に生えているのは、防風林の松の木であり、砂は黒っぽくて、海は磯臭いものだった。それはそれで嫌いではなかったけれど、磯の香りを嗅ぎながら松の木を見て、「これがヤシの木だったら、良かったなあ…」と、ときどきそんな夢の世界に憧れのようなものを抱いたものだった。

そんな僕が、ずうっと頭に描いてきた“南の島”そのものに、モルディブでドカーンと出会ってしまったわけだ。もう僕は、“ヤシの葉が垂れ下がって、その先に真っ白いビーチ、そしてそこからだんだん青さが増していく透明な海”という夢の世界を、何枚も何枚も同じような構図で撮影しまくった。

当時はもちろんフィルムカメラだったので、36枚撮影するのに、1本1000円ほどのフィルム代とその現像代の700円とを合わせて1700円もかかった。にもかかわらず、何本も何本も同じような写真を撮影したわけだ。そのころ僕は、ダイビング雑誌のスタッフとして働いていて、そのモルディブ行きも、もちろん仕事で行ったのだった。帰国後、撮影済みフィルムを見た編集長に、しこたま怒られてしまったのは言うまでもない。

その後25年もいろんな南の島に行っては写真を撮り続けているけれど、モルディブほど僕のもっていたイメージにピッタリの南の島には、いまだ出会っていない。

# 驚き Surprise



.....モルディブ.....  
Maldives

# Ocean

.....モルディブ.....  
Maldives



流れの強いダイビングポイントは数あれど、モルディブの流れの強い時といたら、本当に凄い。なにしろあんな小さな環礁内に、毎日海水が外洋から入ってきては、またドドーンと出ていくのだ。海底の地形によっては、まるで回ってる洗濯機の表面のように波を打ちながら渦を作る。もちろん水中にいますと、その洗濯機の中に入っている洗濯物のようにもみくちゃにされてしまう。

そんな海だからか、エサとなるプランクトンの移動も多く、魚の数は相当なもの。しかもその魚は巨大な群れをつくり、ときには群れがダイバーを囲んでしまうこともある。魚を見に行ったダイバーが、逆に魚に見られている気分になってしまうほどだ。そんな群れに入ると、今度は海流とは別の意味で、洗濯機に入ってしまったような気分になったりする。

陸上の世界は、絵に描いたような南の島で、本当にのんびりとしているけれど、本格的なダイビングをしようとそれなりのポイントに行くと、難易度はかなり高く、海の中では弱肉強食の世界が常に繰り広げられている、それがモルディブの海なのだ。

深く流れ早い海の底で、必死に泳ぐハナゴイの大群や、その周りをブンブン捕食して飛び回るサメやマグロを、ハーハー言いながら撮影する。そのあと、水面上ののんびりした世界に戻って、「ああ、こんな美しい南の島だったな。」と、そのギャップに驚くのが、モルディブの面白さでもある。



## 多くの魚が群れる力強い海中

# Rロマン Romance

.....モルディブ.....  
Maldives



## カップルのためのロマンティックな場所

モルディブは、その島と海の美しさにおいて世界的に有名である。そんな美しい場所には、やはりカップルや新婚旅行のお客さんが圧倒的に多い。特に水上コテージなどは、2人の世界を嫌というほど味わえるので、ロマンチックの極みであると言える。

そんな場所に、たまに一人で行かなくてはいけないのは、僕ら海のカメラマンの悲しいところだ。食事の時など、まわりのテーブルを見渡すと、ほぼ全員カップルでヒソヒソ、イチャイチャと、嬉しそうにしている。そんな中で一人ぼっちのオジサンは、重いカメラバッグを抱えてバタバタとテーブルに着き、誰と話すわけでもなく、だからと言ってまわりのカップルの姿をジロジロ見るわけにもいかず、しかたなく撮影済みのカメラの画像を何ともなしに眺めては、そのやり場のない視線を処理していたりするのがある。まあ、まわりのカップルは、そんなオジサンどころではなく、その最高のひとときを楽しく過ごしているに違いないけれど。

そそくさと食事を済ませ、一人のコテージへと帰っていく。だが安心するのはまだ早い。食事を終えて部屋に帰ってみれば、カップルが当たり前のリゾートだから、ベッドが花で目いっぱいデコレーションされていたりする。そしてその模様は、なんとダブルベッドに巨大な“ハートマーク”ということもあった！

一人で来ていた僕にはこれはさすがにこたえた。せめて客のことをチェックしてから絵柄を決めて欲しいものだと思っただと心の底から思った(まさかそれを知った上でわざとやったのではないだろう…)

ともかく、そこまでオジサン一人が似合わない、カップル、特に新婚カップルがピタッとハマるロマンチックな場所、それがモルディブなのである。



# Action 行動

## 体で感じる自然の美しさ

.....モルディブ.....  
Maldives

はじめは靴を履いて入国し、島に入り、そこでビーチサンダルに履き替えるのが普通だと思う。そして、海に入ったりビーチで遊んだりしているうちに、ビーチサンダルも脱ぎ捨て、やがて裸足でいることの方が多くなっていく人が多いようだ。

僕もそうだった。はじめは裸足で歩くのには何となく違和感があったのだけれど、裸足になった時の足の裏の目覚める感覚というか、痛くすぐたい感触が、だんだんたまらなくなり、そのうちモルディブに行くなり裸足になるようになっていった。

リゾートで、裸足で過ごせるところというのは、実は世界でもそんなに多くはないように思う。モルディブのように、砂でできた小さな島で、掃除の行き届いた1島1リゾートだからこそ、痛くもなく安心して裸足でいられるのだ。

足の裏には全身のツボがあるらしいので、裸足で歩くことでそこが自然とマッサージされることにもなるのだろう。しかし何と言っても、全身でその島を体感しているような感じが、僕にはたまらない。

それと同じように、泳いだりシャワーを浴びたり、また砂に寝っ転がったりしているうちに、だんだんシャツを脱いでいる時間も増えてくる。最終的には、水着だけで過ごす時間が多くなっていく人が多いようだ。もちろん僕もそう。裸足でいるのと同じように、やっぱり体全体で、いつも空気や海の水、砂、そして太陽を感じていなくなってくるのだろう。

着飾ったり、買い物をしたりするのももちろんいいのだけれど、裸足、裸でいられるのが究極の贅沢なのだ、ということ、モルディブはいつも教えてくれる。



Information



●国名：モルディブ共和国 ●ビザ：30日以内の観光の場合は、到着時に無料でビザが発給される ●言葉：公用語はディベヒ語だが、リゾートでは英語が共通語 ●両替：リゾートのレセプションで両替可能。銀行はマーレの銀行の営業は日～木曜日、空港の銀行は飛行機が到着したときだけオープン ●時差：日本からマイナス4時間。日本が正午のとき、午前8時 ●電圧：220～240V 50Hz BFタイプ。日本の電化製品を使う場合は変圧器が必要 ●水：ミネラルウォーターを飲むこと

tsumi-shima  
ダイバーの夢をつみあげていく島

